講演会を振り返る

岡ノ谷一夫（東京大学）

　菅野憲司先生の企画による千葉大学第四回文学部講演会は、前もって岡ノ谷・三浦先生・山本先生・菅野先生の間でメイルによるコミュニケーションがとられ、お互いの立場と疑問点を明白にする機会があった。菅野先生のこの周到な準備と、山本先生による背景説明により、非常に論点の異なる講演者どうしであったが、始めから本質的な議論に入ることができたと感じる。

　まず、私自身の言語の前適応説を簡単に説明しておく。有限の音素の結合によりほぼ無限の単語を作り、それらの文法的な配列により無限の意味を創出できるシステムである言語が創発したのは、おそらくホモサピエンスに至ってからであろう。その意味で、言語は生物学的な進化を経ずに成立したと考えることもできる。しかし、言語は１つの認知機能ではなく複数の認知機能の協同により可能になるものであり、それぞれの認知機能はホモサピエンス以前の動物において漸進的に進化したものであろう。言語とは直接関連のない前適応が十分準備された後、比較的短時間の間に（とはいえ数万年であろうが）、言語というシステムが創発したのだと私は考える。言語を可能にした前適応として、発声学習（鳥、鯨、ヒトなど限定された動物でしか生じない）、音列分節化（新生児でも可能であるが、ヒト以外の動物では研究は少ない）、および状況分節化（多くの動物がこの機能を持つと考えられる）を私は仮定している。

　これに対しての三浦先生の批判は、人間原理の拡張版である観測選択効果にもとづく。人間原理とは、この宇宙が人間を生み出すのに最適な条件を備えているのはなぜかを問う。我々のような知的生命体を生み出せなかった宇宙には、そもそもその宇宙を認識する主体がないからというのが答えである。これと同様に、私の言語起源論は、ホモサピエンスの存在を前提としたものであるという点が、三浦先生の批判であった。これに対して、私は、私の言語起源論はもう少し広くとらえることができ、呼吸による代謝を行う脊椎動物が生ずれば適応可能な起源論であると思うと答えた。三浦先生は、この考えの科学としての価値を問うたが、私は、人間を生み出さなかった宇宙を考慮に入れた言語起源論は無意味であると考える。さらに言えば、私は科学が観測選択効果によるバイアスを持つのは当然であると考える。人間を生み出さなかった宇宙に、私は興味がないのである。

　三浦先生の観測選択効果は、唯我論にも通じるのかと感じた。私たちは結局、他者の意識について確定的なことは何も言えない。自分の意識しか確実なものはない。だとすると、科学も自分の意識の及ぶ範囲に限定されるのだろうか。これに対して、三浦先生は、観測選択効果は、平均値としてのホモサピエンスを仮定した上で考えてよいという説明をくれた。ここで意識の問題は形態的な類似度により棚上げされるという方法論を採らざるを得ないのは、少々残念な気がしたが、三浦先生のご著書である「可能世界の哲学」あたりにそのへんの議論があるのではないかと私は思っている。また、ホモサピエンスの平均値と言っても、抽象的思考が可能なのはそれなりの訓練を受けた一部の人間であり、それらの特権的な人間の平均値なのかという問題も残る。

　これに関連して、意識と言語の関係についての議論も行われた。ここで問題となった意識とは、覚醒水準の意味ではなく、内省的な自己意識のことであろう。私は言語のない意識は可能であると考える。言語があることによって我々の意識は高度に精緻化して論理的思考を可能にした。しかしヒト以外の動物にも内省的な自己意識があると考えない理由はない。さらに、数千年前まで人類は内省的自己意識を持たず全ては神の声であると考えていたという説もある（ジェインズ著、神々の沈黙）。

動物の内省的自己意識の存在を示唆する例として、私はラットのメタ認知の実験をあげた。ラットを訓練し、記憶の明瞭度に応じて課題を実行するか回避するかの選択肢を与える。課題を実行すると正解の場合多くの報酬が得られるが、失敗すると罰が与えられる。課題を回避すると、ヒントが与えられ判断は簡単になるが報酬は減る。ラットはこの課題回避を上手に用いて獲得報酬を最大化するよう行動する。これは、ラットが自己の記憶確信度を内省して行動していることを示唆し、ラットがメタ認知に基づいた行動ができる証拠であると言える。しかしこのことは、ラットの自己意識が私たちと同じものであることを保証しない。とはいえ、どのような課題を使っても、私たちは人間も含めた自分以外の他者が内省的自己意識を持つことを証明することは出来ないのであるから、これから先はほ乳類としての類似性に基づき、論理ではなく直感で自己意識のあり方を考えるのみである。将来「意識や感情を持つロボット」が開発されたとしても、それは結局同じ問題であり、そのロボットに意識や感情があることを証明することは出来ない。

　最後に、講義に参加して下さった先生方からの質問とそれに対する私の答えをまとめておく。質問は秋葉剛史先生と田口善久先生からいただいた。どちらも「創発」に関することである。私の言語起源論では、言語を可能にした前適応をいくつか仮定し、それらの相互作用で言語が「創発」するとした。ここで言う創発には２つの意味がある。１つは、相互作用の実態が現時点ではわからないので、説明ができない現象が発現したという意味での創発である。研究が進むことでこの術語を用いずに済むことを期待する。もう１つは、個々の前適応が偶然上手に結合して言語が自然淘汰を経ずして生まれてきたという意味である。これは、数多の宇宙がこれまで存在し、我々の宇宙においてこの奇跡が発生したことになり、まさに三浦先生の観測選択効果に通じる。百歩譲ってそれが実際に起きたとしても、それぞれの前適応の進化とその神経機構を探る研究は、私たちがどのような生き物なのかを知るために不可欠であると私は考える。

　以上、千葉大学第四回文学部講演会を振り返ってみた。ここでの議論を通して、私自身の言語起源論の限界と適応性を再認識することが出来た。また、三浦先生、山本先生との知己を得たことで、今後の研究の発展が期待できるようになった。菅野先生の企画力と当日講義に参加してくれた皆様に感謝する。